

本稿では、バリ島東部カラングスム県X村に住むある家族に起こった「黒呪術 (ilmu hitam, pengiwa)」事件の事例をテーマとしている。「災厄」をめぐる認識や対処が変容する様態を長期にわたって調査し、時系列的に観察することができた。そこで問題として設定したのは、黒呪術師と目される人間あるいは「被害者」やその周囲の人間のなかでどのように生成され、展開していくかというプロセスである。というのは、人々は黒呪術の語りを起点として多様な社会的諸実践を展開し、黒呪術そのものを越えた社会的、道徳的、政治的意味を生み出すからである。

この問題点を念頭において本稿は、「事件」以前から以後にかけての個人・集団・社会のコンテキストを分析していく方法をとる。一連の出来事がどのような人間関係のマトリクスの中で生じ、出来事の経緯によってそれらの人間関係にどのような変化が生じたか、そして、それらの変化がどのような新たな物語を創り上げていったかを詳細に追いながら、バリ社会の人々が黒呪術に蓋然性を与え、また黒呪術が人々の行動に有効性を与えるコンテキストを問うことは、呪術研究にとっても重要な視角であろう。さらに、このような視座から、従来のバリ文化研究における黒呪術の位置づけを再考し、「黒呪術」をめぐる実践が、密接に絡み合いながら起動する複数の文化装置の中で展開する様態を明らかにすることを本稿の目的としたい。

本稿では、「黒呪術に起因する災厄」の経験がいかに人々の日常の中で展開していくかに着目し、多様なコンテキストから考察を試みた。人々の災厄に対する対処法やどのようなコミュニケーション・ルートを使用して災厄を生成し、それを変容させていくかが提示できた。そこには、災厄という緊張状態への処理において、黒呪術に限られないさまざまな文化資源が動員し、最終的に本来なら黒呪術と異なるコンテキストに位置する「祖霊祭祀」に接続し事態を収束する様態がみてとれたのである。その時々の問題を、人々は呪術医や占い師指示をうまく用いてクリアしていった。そんな彼らにとって、正しい行動は正しい結果をもたらす、という信念から導かれる遂行効果というべきものが存在したのではないだろうか。

また、コミュニケーション・プロセスの分析から、黒呪術事件が発生する要因が、たまたま重なったに過ぎない複数の病や事故、そして占い師や呪術医などの専門家の助言、黒呪術という文化要素をのぞいた個別の人間関係が強く影響していることが明らかになった。

本事例の中で特筆すべきは、黒呪術師への裁きというクライマックスがないまま、事件が終息した点だろう。黒呪術師は、多数の声、多様な感情、多数の主体によって日常に現れた異質なものとして構成され、排除されようとしていた。だが、祖霊祭祀の遂行によって、異質なものとの調和と不調和を含み込む総和が創り出されたのである。またそれにくわえて、黒呪術に端を発する混乱から祖霊祭祀による安定へのプロセスは、「黒呪術事件」以前と同じ安定ではなく家族関係のドラスティックな改革をも導いたのである。「黒呪術事件」というスキャンダルによって、それまで家族のなかで権勢を振っていたとされる「黒呪術師」とそれを擁護した家長の権威は凋落し、新しい世代の人間が台頭して高い地位を獲得したしたのである。だとすれば、黒呪術はネガティブな側面だけでなく、

人間関係における緊張の膨張と収縮を促し、集団構造を改革するという側面が垣間見られたのである。